

## ■尾高惇忠(藍香)

おだかじゅんちゆう  
富籤流行・・・1830＝

渋沢栄一の成長に大きな影響を及ぼし、維新後は、官営富岡製糸場の初代工場長になった。

武蔵国榛沢郡下手計村で、名主尾高勝五郎の長男に生まれる。母は血洗島村渋沢宗助の妹やへ。通称新五郎。

幼時より眼光鋭く、活発で気性も荒く、いくさごっこを中心であったが、

・・・・・・1836＝6歳： 剣客大川平兵衛のもとで神道無念流を学ぶ。村の長老から「四書」の教えを受けるや、知能の高さを示し、  
**大塩平八郎乱**1837＝7歳：  
適塾オープン・・・1838＝8歳： 弟長七郎が誕生。  
**蚕社の獄**・・・1839＝9歳：

**天保改革始**・・・1841＝11歳： 妹千代が誕生。水戸藩主徳川斉昭が水戸城外千波ヶ原で追鳥狩を行うのを、父と一緒に見学して感激、水戸学の尊皇攘夷思想にも傾倒して行く。  
家業(米、塩、菜種油、藍玉など)に従事しながら、伯父渋沢宗助の手伝いをして養蚕の知識を、栄一の父渋沢市郎右衛門からは製藍の方法も習得、母が子供たちを置いて実家に帰ってしまう事件が起きた際には、渋沢家に懇願に出かけ、母を取り戻すことに成功、孝行息子と評判になる。

**阿部正弘首座**1845＝15歳：  
孝明天皇・・・1846＝16歳： 感心した渋沢市郎右衛門が子の栄一を学ばせようとしたことから、**\*自宅で尾高塾を開いて、四書五経や水戸学を教え始め、10歳下の従兄弟渋沢栄一の人間形成に大きな影響を与えて行く。**  
・・・・・・1848＝18歳：

**ペリー来航**・・・1853＝23歳：  
この間、遊学で来村した菊池菊城が渋沢宗助宅に開設した私塾(本材精舎)には、渋沢栄一とともに入門。

蕃書調所・・・1857＝27歳：  
五ヶ国条約・・・1858＝28歳： 栄一とともに長野へ製藍を販売に行き、「巡信紀詩」を執筆。この間話が進んで、妹千代と栄一が結婚。

**桜田門外変**・・・1860＝30歳：  
世相が慌ただしくなって、尊皇攘夷運動への血が騒ぎ、

8月18日政変 1863＝33歳： 高崎城乗っ取り計画を立てるが、弟長七郎と激論を交わした後、中止。  
禁門の変・・・1864＝34歳： 精神不安定になった長七郎が通行人を斬り殺してしまい入牢。一橋家(慶喜)の家来になれば助けるといふ話があり、面子を捨てて、栄一とともに家来になる。その後、自らも天狗党に協力した嫌疑をかけられ入牢するが、すぐ赦免されるなど、幕末の混乱も極まってくる。

薩長同盟・・・1866＝36歳：  
**明治維新**・・・1868＝38歳： 渋沢喜作らと上野彰義隊結成に参加。振武軍を結成し、飯能に陣取るが、飯能戦争で官軍に敗れ、弟平九郎が自刃。釈放されていた長七郎も病没してしまう。

戊辰戦争終・・・1869＝39歳： 備前渠仁手取水口廃止で、新渠開鑿事件が発生するが、  
初の日刊新聞1870＝40歳： 解決するとともに、**\*勸農局の製糸場場長に栄転、富岡へ向かう。富岡製糸場開設が決定し、**  
廃藩置県・・・1871＝41歳： ブリュエナが機械購入のため帰仏する間、**製糸場予定地の整地、瓦・煉瓦なども手配して着工。**  
学問のすすめ1872＝42歳： ブリュエナが日本に戻り、大蔵省が工女募集心得を北陸道の10県に頒布。**\*富岡製糸場の竣工とともに、娘勇が伝習工女第一号となる。"秋蚕(あきこ)"の名が初めて生まれ、日本蚕糸業発展の一大革命であると信じて、操業開始、経営に当たる。**

**明治6年政変** 1873＝43歳： 工女増員のため、寄宿舎、病室等を建て増し。英照皇太后・昭憲皇后が行啓。

初の民間工場1875＝45歳：  
三つの内乱・・・1876＝46歳： 富岡製糸場が富岡製糸所と改称。**\*"秋蚕"について本省と見解を異にすることを理由に、辞職。**  
**西南戦争**・・・1877＝47歳： 渋沢栄一から依頼されて**第一国立銀行に入り、盛岡支店の支配人となる。**

**明治14年政変**1881＝51歳：

秩父事件・・・1884＝54歳：  
内閣発足・・・1885＝55歳： 北上川の舟運を近代化するための北上回漕会社の設立に尽力。

国民之友始・・・1887＝57歳： 第一国立銀行仙台支店の支配人に転じる。

**帝国憲法発布**1889＝59歳： 有志と宮城貯蓄植林組合を設立。渋沢栄一が日本煉瓦製造株式会社を創設し、下手計村に工場が竣工。

大本教・・・1892＝62歳： 加藤彦七郎との共同研究で藍碇製造法の特許を取得。**第一国立銀行を辞して、自適の生活に入る。**  
郡司千島探検1893＝63歳：  
**日清戦争始**・・・1894＝64歳：

田中正造直訴1901＝71歳： 深川区福住町九番地で、**没した。渋沢栄一はその死を悲しみ、自ら墓碑銘を撰書している。**